

中国昆蟲十一卷一册
第十一卷(第四十册)

京鹿子



11月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その九十八



蝻蛄鳴いて闇の欠片の疼きだす
終止符を打てぬ弱さや蝻蛄鳴けり
宵闇や星のポストへ返し文
宵闇の風の戯れ糸電話、
切り取るは近江一国稲雀
風に添ひ名水に添ふ紅小萩

揺れてなほ矜恃こぼさず萩真白
萩月夜ひとりあそびの通りゃんせ
萩蝶の卍跳びなる寺育ち
馬肥ゆる並べて夫への背任罪
燕去ぬ約束反古の画鋏跡
隣国へ是々非々通す鴟の国
けらつつつき保守も野党も膿隠す
鬼の子とグラスを合はす泣き上戸

近詠

名誉顧問

和田 照海



ラフランス

海峡の渦音日和鴉の贄
落鯛の見事な顎や浜の糶
方舟へ猫転生の島の秋
蟹の子のつねの遅刻や棗の実
漁を継ぐ倅貌なるラフランス

近詠

名誉顧問

塩貝 朱千



盆が来る

新涼や小さき祠の氏神さま
盆が来る閑かな里に臨時P
白山羊に白紙いちまい雲は秋
碧天や三十九度の秋迎ふ
風船かづら前頭葉を考へる

神麓集

近詠

福主宰

村田あを衣



秋扇

鷺草のふはりと風に予後日和
 露草の終のしづくを受け止めむ
 指切りは永久への恋路冬の虹
 千羽折る終の白さや月冴ゆる
 今生の折り目を畳む秋扇

立冬 沼田巴字

炎天 直江裕子

秋澄みて鳥遊ばせる遊魚池
 余生なほ福寿ありけり吊し柿
 在りし日の叱り声かなそぞろ寒
 立冬や一大事てふ教へあり
 飢える児の終らぬこの世冬初め

炎天やにっちもさっちも行かぬ影
 アイドルの貼りつく笑顔灼けてゐる
 咲き切った花火のしづく持ち帰る
 安寧と自虐おりなす冷房に
 西瓜わる程の力を未だ持ち

今朝の秋 植村蘇星

鱒鱒 高木晶子

祖に感謝妣の口ぐせ今朝の秋
 朝蜘蛛に合ひし大吉腕まくり
 福を呼ぶ一日一笑秋の暮
 人は皆師なり背見て秋の暮
 累代の変遷なりし大枯野

土用三郎家事の序列は決りごと
 お羽黒蜻蛉様子見に来てすぐ帰る
 藪草茶紫蘇茶夏鯉よく跳ねる
 蓴茶の小さき器ざらざらす
 滔々と馴染む川音鱒鱒なめ

萩の夜風 伊藤希眸

秋うらら古墳にねむるトンボ玉
三日月や頭上を長き貨車通る
転勤す萩の夜風に里ごころ
秋風や音は何かに当る音
七五三祝ひに泣く子笑ひし児

送り火 奥田筆子

送り火やビルはガラスで出来てをり
揚花火あられの爆ぜるこだまして
夏わらびぽきつと鉛筆の匂ひ
水深を測つてをりぬ螢草
けもの道花野を抜けて地下鉄に

冬青空 井上菜摘子

がらんとして冬青空もみぞおちも
結願や雪の匂ひに京都駅
冬の蝶生涯とほす一張羅
自然体にあるも疲るる浮寝鳥
冬夕焼終点をバス折り返す

芋殻火 山中志津子

噴水に自分史省略されにけり
くずきりや吉野造りの奥座敷
ひまはりの迷路戦場へと続く
花時計しつとり濡るる今朝の秋
芋殻火や母のやうには生きられず

神麓集

色変へぬ松 鷺山珀眉

賜高音杜の一景入れかはる
種あかしすればあけびの弾けをり
翳といふ影を抱けば秋のこ糸
鯖鮎や草薙ぐままの川中州
全問正解まで色変へぬ松

夏 鶯 亀井福恵

偕老や夏鶯のこ糸の張る
とうすみの尾の触れてゐる被爆川
唐突に起こる耳鳴り沖縄忌
あめんぼう原爆ドーム揺らしけり
わが界限まだ見尽くさず蕎麦の花

微熱中 西村白杼

芋茎干す軒先深き鬼の里
秋立つや明日へのページ風が繰る
人生に悔いありませぬ酔芙蓉
稲穂出て村はたちまち微熱中
赤すぎて怖いカンナに遠廻り

史を紡ぐ 菊池和子

二人して思ひ出ばなしソフトクリーム
石庭のわけ有りとなんぼテレパシー
今昔の蟬時雨の詩史を紡ぐ
他人事と済ます気楽さほととぎす
醜草に生きる証しの草いきれ

神麓集

神麓集

暁ひぐらし 安田優歌
美女薄命てのひらの白桃を剥く
暁ひぐらし終の命を謳歌せり
己が名はおかめ南瓜戦の世
逝く人の風はたましひ星流る
胸中の妖精の詩虫集く

人魚の涙いろ 本郷公子

はかなさを楳に七日の夕かなかな
月白の海は人魚の涙いろ
ソネットを吟ずるかなかなの嘆き
朽ち舟の私語ひたひたと浜晩夏
とんぼ殖ゆ朱雀の庭の水の綺羅

今朝の秋 石原孝人
暮れてなほ残暑織り込む機の音
雷雲を背負ひて下る歩荷かな
せせらぎの音に暮れゆく青田かな
本殿へ長き石段かたつむり
手に掬ふ風の軽さや今朝の秋

貝風鈴 佐藤千恵

検査後の静かな寢息星涼し
ブラインドの隙間薄暑の世を見せて
妹の夫も一病はったい粉
海はるか貝風鈴の鳴りやまず
故郷の訛にもどる蓼の花

神麓集

十六夜 山田和

十六夜の月待つ砂丘火照りをり
ユングフラウ牛の鈴の音涼しかり
母の鬘日毎に小さく白芙蓉
猪垣のトタン錆びたる夕茜
秋風や肺活量計赤き玉



鈴鹿野風呂 十句（昭和六年）

めでたさの鬚をそのまま報春花
庭の雪かたまり汚れ水仙花
嵐峡や雨にけむらむ花といはず
醍醐寺の小坊主も唐て花床几
一色に枯れたる比叡の山おもて
方相氏立ち向ひたる御本殿
鮎を掛く釣棹高く岩の上
祇圓會や京に古りたる人形店
白萩にホ句精進のめぐり来ぬ
片かげに砥石を置いて松手入

（真由美抄出）

英華採集

水飯を掻き込む銚の大方

京都 安田 呉遊

京都の三大祭の一つである祇園祭は、夏の風物詩として京都人だけではなく国民の関心事である行事。中でも最大イベントは銚巡行であり、その前の銚の組立てには注目が集まる。組立には大工方、手伝い方、車方と呼ばれる作事方三役が務めるようだ。大工方は、銚屋根、囃子台を受け持つがこの作事方の人達の組立の時の多忙さは計り知れないものがあるに違いない。季語の「水飯」を掻き込むという措辞に実際に見聞きした実相が見えてくる。

土臭きひと夜の火蛾を掃きにけり

京都 仲井 タミ江

蝶と蛾を比べて蛾の方が好きです、と答える人はごく希であろう。私も大嫌いな部類の虫の一つである。嫌いな点は、あの派手な薄気味悪い翅の色にあるがこれこそが外敵に対しての警戒色となったり有毒なものもあり身を守っているらしい。掲句の火蛾は、夜行性である蛾が誘蛾灯に集まって自死をしたものを言う。夏の夜の誘惑に負けて一夜のアバンチュールを求めた結果の悲惨な結末である。土に返った火蛾を「土臭き」と表現した上五に妙がある。

A4の納まる鞆蟻の列

京都 岡 温子

会社勤めを経験された方は、よく分かっていると思われるが何につけ書類に纏めるサイズはA4とその倍のA3が多い。A3は半分に分ければA4となりスッキリとする。色々な資料を上司に説明する場合には、この書類の作成の仕方に社員の優劣の評価が決まる、と言って過言ではない。故に、A4の書類が納まる鞆が重宝されるのである。掲句は、この鞆を持ったサラリーマンが駅に向かって通勤している様を詠んでおり季語がよく効いている。



京鹿子集

鈴鹿呂仁 選

水琴集

蟬白き腹門前に物申す

東京 大政 睦子

銀座ここ異國の地ですか夏真中

「地球沸騰」新語生るある日日草

牛歩なれど首を伸ばして夏の宵

打水や旧邸楚楚と立ちあがる

ジャンクション迷はず来ませ盆の客

朝倉 小池かつえ

屑金魚日の斑啄み倦みてをり

母許へあとひと駅や夜の秋

身二つに切れても百足虫生きむとす

陶土搗く唐白の音明易し

遠雷や父は黙つても言へと

福山 政時 英華

夏帯を締めてをんなの意地通す

ときめきは疾うに忘れしうすごろも

少年のバケツに一尾鯛雲

電柱を楯にバス待つ炎天下

夕風や暮れてゆくまで黙とほす

岡山 岸本 順子

炎昼や思考回路を焼き尽す

爆ぜ柘榴火点し頃に破目はつす

カンナ咲くけふは緋色の決めドレス

カンバスに姥百合白し避暑の宿

雲海の鬼を匿ふ大江山

宇治 北田せい子

子の寢息母の寢息やハンモック

市電力フェ母はイチゴのかき氷

浴衣ペア手つなぎ入る水族館

子ら駆ける暑さ叫びてまた走る

あかときの風をほぐすや牽牛花

朝顔の未来をさぐる遊び蔓

久世 貝路 紅沙

朝顔の鉢しかと抱き引越しす

沙汰のなき友の筆跡夜の秋

検索の湯めぐりの旅夜の秋

白蓮のまだ解かざり祈りの手

大雲海槍も剣も孤島なす

京都 福森 順子

行く夏や郷愁を呼ぶ貨車の音

いのちの森総身に浴ぶ蟬時雨

水飯を掻き込む銚の大工方

安田 呉遊

地下潜り聖体式の秘儀つなぐ

商いは牛の涎や蝸牛

ご神水畏み注ぐ洗ひ飯

銚巡の決まりし安堵町涼し

土臭きひと夜の火蛾を掃きにけり

仲井タミ江

僧兵の荒き呼吸や竹伐会

山寺の一灯をともし夏椿

あかときの天地返しや大根蒔く

美山鮎強火遠火に焼きにけり

A4の納まる靴蟻の列

岡 温子

磨き上ぐSLどれも夏の星

半時を海月の夢の中にある

山椒魚あくびの口の白らなる

前世はくノ一蜘蛛のかくれんぼ